

京都をつなぐ無形文化遺産

「京のきもの文化」

— 伝統の継承と新たなきもの文化の創出

選定にあたって	1
きものの成り立ちと現状	3
きものの魅力	4
京都のきもの文化を支える技・ひと・道具	6
きものと和の文化	13
伝統の継承と新たなきもの文化の創出	17
(参考) きものの種類等	18

画像協力：公益財団法人京都和装産業振興財団
西陣織工業組合
京友禅協同組合連合会
公益社団法人日本図案家協会

選定にあたって

きものは長い歴史の中で受け継がれてきた、日本が世界に誇る民族衣装である。「きもの」は、「洋服」に対する言葉として、「和服」を指して用いられ、今では「kimono」として国際的に通用する衣装になっており、外国の方がきものを買求めることも少なくない。

京都は、山紫水明の自然、1200年を超える歴史の中で人々が築いた景観が相俟って、美しいまちを形成している。そして、京都の人々は、自然に対する畏敬と親しみの念を持ち、四季の移ろいを大切にしながら、豊かな文化を創造してきた。きもの文化は、このような京都の自然、まち、人々により育まれた。

また、きものは、茶道、華道、香道、能・狂言、日本舞踊といった、我が国固有の文化とともに、発展してきた。現在でも、京都には、多くの寺社の本山・本社、芸道や芸能の家元、花街、町家など、「和」の文化の源泉が存在しており、京都は日本のきもの文化の中心となっている。

その歴史は、平安時代からの宮廷を中心とした「みやびの文化」の広がりとともに、様々な技術・技法・意匠を用いた手工業が発達、集積してきた。なかでも、京都の伝統産業を代表する「西陣織」は、平安京に設けられた「織部司」がもととなっており、その高い技術は世界的に認められている。「京友禅」は染色技術が発達した江戸時代に創案され、その華麗な意匠は、憧れとなっている。京都のきもの生産工程は、多品種少量の高級品生産に応えられるよう、分業が著しく発展しているのが特徴である。

京都では、歴史や文化を背景に、繊細な職人の技による、形、色、模様のすべてに和の文化の粋が投影された、日本の美意識の集大成ともいうべき、伝統と格式を備えたきものが、維持継承されている。

このようなきもの文化は、最大の生産地、集散地としての強固な産業基盤の支えにより発展し続けているが、近年、生活様式の変化などにより、きもの消費は落ち込み、後継者の不足で貴重な技術が年々失われるなど、その基盤が揺らいでいる。

一方、和の文化を再評価する気運の高まりとともに、和のエッセンスを取り入れつつも、格式にこだわりすぎず、現代的なファッション感覚で気軽にきものを楽しみたいというニーズが高まっている。そして、京都は、きもの文化の中心として、こうしたニーズに応える新たなきもの文化を創出し、全国へ発信していく役割が期待されている。

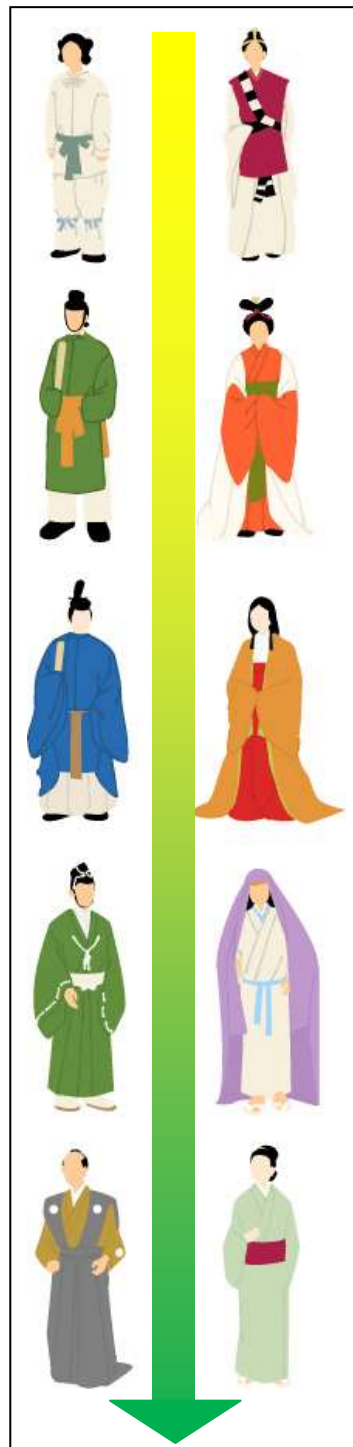
「伝統の継承」と「新たなきもの文化の創出」、京都には二つの面が求められているが、伝統を守りつなぎながら、時代の変化に即して新たな文化を創出し、両者の共生を図るなかで、懐の深い重層的な文化を作り上げてきた姿こそが、京都のきもの文化である。

我が国には日常的に民族衣装であるきものを着る習慣が今も残り、また民族衣装を大切にしようという動きが広がっている。グローバル化が進んだ現代において、海外の人々をも魅了する、四季の変化に富んだ豊かな風土に育まれた独自の感性が凝縮された、和の文化を象徴する存在としてのきものは、市民の誇りであり、守り継がなければならない我が国の貴重な財産である。

京都、そして日本になくてはならないきもの文化が、悠久の歴史が育んできた優れた美意識、伝統の神髄を継承しながらも、現代の感性で意匠や着こなしを変えつつ、未来にわたって市民生活の中で愛され続けていくよう「京のきもの文化 ―伝統の継承と新たなきもの文化の創出」を“京都をつなぐ無形文化遺産”に選定する。

きものの成り立ちと現状

項目	内容・特徴
<p>きものの成り立ち</p>	<p>きものの歴史は、縄文時代、一枚の布を巻きつけた巻布衣（かんぷい）、布の真ん中を切って頭を出す貫頭衣（かんとうい）に始まる。大陸文化の影響を受けて筒袖のものが現れ、平安時代には日本の気候風土に合わせ、身幅や袖幅がゆったりとした男性の束帯、女性の十二単が貴族の装束となる。武家社会に移ると、動きやすさが重視されて袖丈の短い小袖が主流となった。室町時代頃の小袖は、袖幅が狭く、お端折りのない実用的な衣服であった。桃山時代に豪壮華麗な文化を背景に小袖は派手になる。江戸前期には、描き絵染が生まれ、染織の各種技法が発達し、今日に通じる技法がほぼ確立された。また、江戸時代には、帯の結び方、髪形、小物の細工なども凝ったものが生み出されていった。</p> <p>明治以降は、洋装が入ってきて、きものの柄も洋風のものが見られるようになった。生活習慣も西洋スタイルに次第に変化するなか、きものは大切な儀式やぜいたくを楽しむ象徴となっていった。</p> <p>「きもの」という名称は、桃山時代に、小袖を「着るもの」、「きもの」と呼ぶ例が見られ、公家・武家階級が身に着けていた大きな袖口を持つ「大袖、広袖」が着られなくなると、明治時代には和装を表す言葉となった。今では「kimono」は、国際的に通用する言葉になっている。</p>



<p>現状と課題</p>	<p>戦後、たんすが空っぽの状態から人々はきものを買求め、高度経済成長期とともに、きもの生産量は飛躍的に伸びた。しかし、昭和50年代に入ると、日常の生活風景からきもの姿が消え、大衆呉服の生産量が大幅に減少していった。やがて、好調を保っていた晴れ着や式服など高級呉服の売れ行きも、バブル崩壊後は減少していく。</p> <p>消費の低迷による最も大きな課題は、生産地が打撃を受け、きもの文化を支えるものづくりの力が落ちていることである。生産量の減少は、きものづくりの根幹である分業制の維持を困難にし、後継者の不足により失われた技術もある。古い能装束などは二度と同様の品質で生産できないものがあるという。また、道具や原材料の製造事業者の廃業も広がっている。</p> <p>一方、消費者においては、購入や着用することが少なくなるに伴い、品質や価格、場面に合わせたきもの着方、帯や小物の組み合わせなどの知識を習得する機会も減少し、わからないので敬遠するという悪循環に陥っている。そのため、きものと組み合わせ魅力的なサービスやイベントの展開など着用機会の創出とともに、きもの似合う場面とふさわしい着こなしの提案、製造工程の公開、購入後のサポートなど、より具体的でわかりやすい消費者への情報提供が必要となっている。</p>
<p>課題の解決に向けた取組</p>	<p>京都市では、行政ときもの関連業界が連携・協力し、きもの姿の方を対象としたコンサートなどのイベントの開催や、きもの展示会の実施、一定期間交通機関の利用や施設の入場が無料になるなど、きもの魅力をPRし、着用機会を創出する取組を積極的に推進している。また、きもの着用者には割引や粗品プレゼント等の特典が受けられたり、タクシーの料金が割引になるなど、民間企業における自主的な取組も行われている。</p> <p>さらに、市立中学校における浴衣の着付け体験授業の実施や、小学生を対象とした「ジュニア京都検定」のテキストブックにおいて、きものを取り上げるなど、教育における取組の充実も図っている。</p>

きもの魅力

項目	内容・特徴
<p>きもの魅力</p>	<p>生活様式が変化するなか、着用機会は少なくなったが、きもの美しさや素晴らしさは再評価されている。</p> <p>きもの魅力は、まず、四季を持つ日本の美意識が表現され、長い歴史の中で磨かれた文様や意匠などが奥深い和の文化を表している点である。</p>

	<p>平面的で画一的ともいわれる様式の中に本質の美を際立たせようとするきものの美しさには、日本のこころが感じられる。</p> <p>きものは、日本人の体型の長所を活かした、日本人に似合う装いでもあり、きものと、帯や小物の組み合わせ次第で趣が変わり、幅広いお洒落が楽しめる魅力も大きい。</p> <p>男性のきものにおいては、羽裏（はうら）や襦袢（じゅばん）、しゃれ紋など、隠れたお洒落が楽しみの一つである。</p> <p>高価な印象もあるが、流行が少なく、多少の体型の変化にかかわらず、長く着ることができ、ほどけば一枚の反物に戻り、多様な仕立て直しが可能のため、大切に保管して、世代を越えて子や孫へ受け継がれるものも多い。</p> <p>きものを着ることで注目されること、周囲の目を楽しませることなども魅力の一つである。</p>
<p>きものを 通して 磨かれる こころ</p>	<p>きものは、長く着るものであり、親から子へ大切に引き継がれる。そのため、家庭では、きものを着る時には手を洗い、虫がつかないようにきっちりと畳んで保管し、季節ごとの虫干しなどに気を配る。破損した場合も、繕ったり、端切れをつなぎ合わせたり、裏地や帯にしたり、工夫して長く愛用した。こうした家庭の営みの中で、ものを大切に扱うことを子どもたちは自然に学んでいった。ものを大切にすることは、現代のエコロジーの精神にも通じる。</p> <p>きものを着ると、自然と背筋が伸びて、美しい所作が身についてくる。動きが制約されるからこそ、周りに気を配る心遣いが生まれてくる。</p> <p>京都には、普段はしまつしているが、着るものにこだわり、特別な晴れの日には質のいいきものを着る気風があるが、これは、相手をもてなすために着るという考え方、おもてなしのこころに通じている。</p>
<p>きものの 映えるまち</p>	<p>きものの映える日本らしい町並みをきもの姿で歩くことは、非日常を体験することにつながり、観光の楽しみの一つとなる。</p> <p>きものの映えるまちとして、代表的な観光地である京都では、国内外から訪れる旅行者等がきものや浴衣を着て、祭などの行事に参加したり、社寺等を散策するなどの楽しみ方も定着してきている。</p>

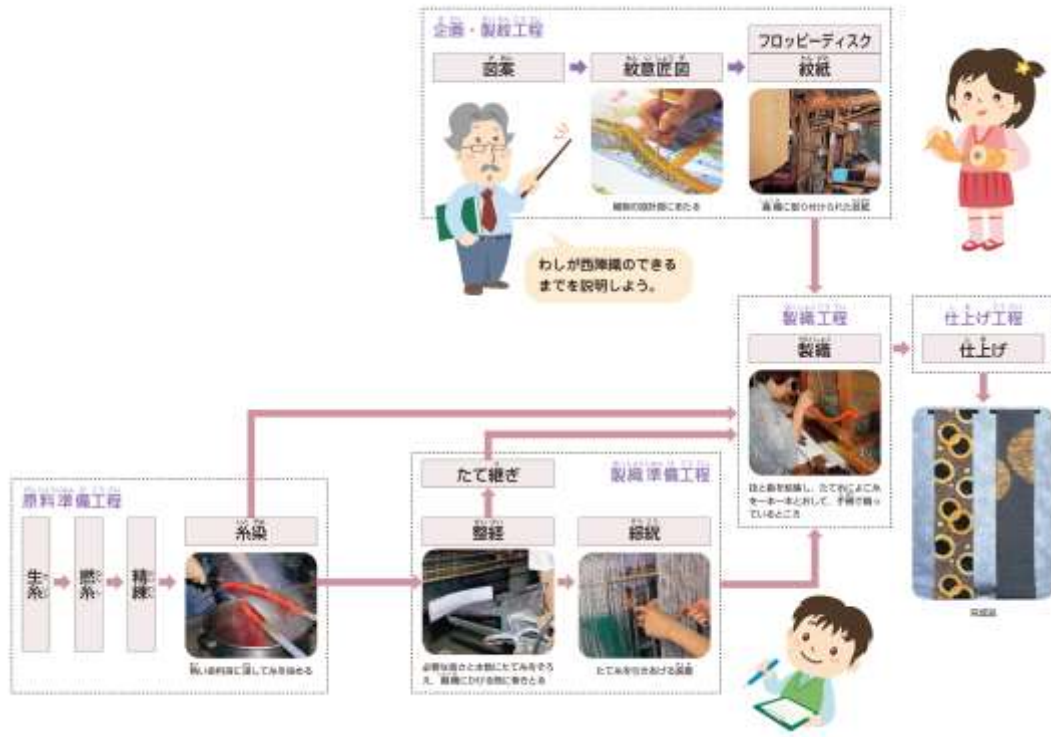
京都のきもの文化を支える技・ひと・道具

項目	内容・特徴
きもの文化が育まれた背景	<p>三方を雄大な山々に囲まれ、鴨川などの豊かな水に恵まれ、寒暖の差の大きい気候のもと、四季が鮮やかに移ろいゆく京都では、自然との共生を大切にしてきた。また、平安京遷都以来、永きにわたり都が置かれ、文化の中心地として栄えるなかで、季節感やおもてなしの心、本物へのこだわりといった精神文化が生まれ、きもの文化に浸透していった。</p> <p>また、京都は、宮廷、宗教、能、祭などの装束の生産の中心であり、これらの技が、きもの文化に厚みを持たせる存在となっている。</p>
京都のきもの歴史	<p>平安京への遷都が行われると、朝廷では絹織物技術を受け継ぐ工人たちを、織部司（おりべのつかさ）という役所のもとに組織して、綾・錦などの高級織物を生産させ、貴族の彩色豊かな衣服がつくられていった。鎌倉時代に入ると、武士の天下となり専従職人たちは解雇されるが、大舎人町（おおとねりまち）というところに集まり、大陸から伝えられる新しい技術を取り入れながら、生産を続けた。</p> <p>応仁の乱で京都の街は焼け、職人は各地に四散するが、戦乱が終わると戻った職人が、西軍の陣地跡で織物業を再開し、まちは「西陣」と呼ばれるようになった。江戸時代には、小袖の発展とともに、きものを留める紐であった帯が装飾的となり、存在感を示すようになった。</p> <p>世界に誇るものづくり都市である京都から、きもの文化は伝播した。江戸時代、各藩は京都に「呉服所」という御用商人を置いており、こうした商人は呉服類の調達のみならず、儀礼のための装束や作法などを教示する役割を担っていた。やがて、絹織物の着用が百姓町人にも認められるようになるに伴い呉服商は発展し、新たな商法を入れた三井越後屋をはじめとする巨大店舗が生まれた。三井越後屋が室町に仕入れ店である京店（きょうだな）を置いていたように、多くは生産の中心地である京都に本拠を構えて、江戸や大坂などの消費地へ営業を展開していた。</p> <p>高級呉服商雁金（かりがね）屋に生まれた尾形光琳（おがたこうりん）は、元禄時代を代表する絵師であるとともに、きものデザイナーとしても活躍した。江戸時代中期には、京都で人気のあった扇絵師宮崎友禅斎（みやざきゆうぜんさい）も、呉服商からの依頼を受けて、きもの図案のデザイナーとして活躍し、自由で斬新なデザインの友禅染は、大流行した。</p>

	<p>当時の意匠、織技術、染色技術などは圧倒的に京都が突出しており、その流行は上方から江戸へ伝播し、やがて全国へと広がった。また、街道の整備や経済の発展により京都と地方の取引が盛んになるにつれ、全国各地に技術が伝わった。</p> <p>尾形光琳のほか、明治以降は竹内栖鳳（たけうちせいほう）、堂本印象（どうもといんしょう）ら京都を代表する画家たちが友禅の下絵を描くなど、絵画的な美しさが磨かれていった。</p>
<p>きものを 支える 技・ひと</p>	<p>（重要無形文化財保持者等）</p> <p>有職織物、友禅、羅（ら）、刺繍などの技術が重要無形文化財とされており、その高度な技を体得し、精通されている方が、重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されている。</p> <p>また、染織繡の技は、祇園祭等の祭礼幕のような文化財を保存する技術（選定保存技術）としても選定されており、京都の祭礼文化を豊かにしている。</p> <p>（伝統産業）</p> <p>伝統的な技術と技法で、日本の文化や生活に結びついている製品を作り出す産業として、京都市では伝統産業74品目を指定しており、このうちの多くは、きものに関わる産業である。</p> <p>○ 西陣織</p> <p>5～6世紀頃、豪族・秦氏が養蚕と織物をはじめたことに起源し、15世紀応仁の乱の後に基盤を築く。西陣織は極めて多種多様で、綴、経錦、緯錦、緞子（どんす）、朱珍（しゅちん）、紹巴（しょうは）、風通（ふうつう）、縋り織、本しば織、ビロード、絣織、紬等の品種があり、多色の糸を使用し絢爛豪華な糸使い模様の精緻さを特色とする。</p> <p>○ 京鹿の子絞</p> <p>10世紀初頭の宮内での絞り染めを起源とし、17世紀には「かのこ」の名称で広く愛用される。絹織物の生地に、多種のくくり技法と、染め分け技法を駆使した複雑多彩な模様染めである。</p> <p>○ 京友禅</p> <p>古くから伝わる染色技法を、17世紀後半に宮崎友禅斎が集大成したことからこの名がついた。現在、高度な技法を受け継ぐ手描友禅と明治初期に創案された型友禅がある。型友禅の出現は友禅を庶民のものにした。</p> <p>○ 京小紋</p> <p>起源は17世紀初頭で江戸時代の武士の袴に端を発している。明治初期より単色から彩色へと変化しながら友禅染と互いに刺激しあって技法を向上させてきた。色柄は、落ち着きのある渋さが特徴である。</p>

	<p>○ 京くみひも 平安時代が起源とされ、帯締、羽織ひもを主に根付ひもなど80種近くの種類を生産。丸台、角台など幾つもの組台を使う手仕事で、古都の文化に培われた雅な京工芸の一つである。</p> <p>○ 京繡 その起源は平安遷都にさかのぼり、貴族の繡衣繡仏、武具などに活用され発達した。絹や麻の織物に絹糸、金糸、銀糸などを用いた刺繡は多種多様な技法が使われている。</p> <p>○ 京黒紋付染 喪服、黒紋付などに用いられる伝統技術である。赤や青に染めてから黒色染料で仕上げるのを、紅下黒（べにしたぐろ）、藍下黒（あいしたぐろ）と呼び、それらは独特の風格をもっている。</p> <p>○ 京足袋 戦前には35軒ほどあった京都の足袋屋も今ではわずかに数軒となった。生地には吸湿性のよい木綿が用いられる。伸縮性の少ない生地を用いて、足にぴったりと添う足袋に仕上げるには、高度の熟練が必要とされる。</p> <p>○ その他 花かんざし、京和傘、京扇子等も、きものに関わりの深い伝統産業製品である。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> <p>(西陣織)</p>  </div> <div style="text-align: center;"> <p>(京友禅)</p>  </div> </div>
<p>分業制</p>	<p>西陣織や京友禅など、京都のきもの生産工程は、複雑に細分化された分業制であることが特徴である。各工程は、それぞれ高度の技術を持つ専門の職人が担っている。分業制のもとでは、注文された品をみつらえるため、各工程をつないでコーディネーターのような役割を果たす「悉皆（しっかい）」「染匠（せんしょう）」と呼ばれる職種が存在する。分業制により、多品種少量生産のニーズにも対応することが可能となっている。</p> <p>反物で出荷されたものを、目的や体型に合わせ仕立てるのが基本である。</p>

西陣織の主な工程



京友禅の主な工程（手描友禅）



京友禅の主な工程（型友禅）



（出典：わたしたちの伝統産業／発行：京都市，京都市教育委員会）

近年は、一つの工房で複数の工程を担う生産体制を導入しているところもある。

また、新たな製織技術、インクジェット捺染技術、紋織物関連のデータを処理するソフトウェアの開発などが進んでいるほか、ARによる情報提供や3Dプリンターによる道具製作など、新しい技術を活用する研究も始まっている。

きものを
支えるまち

分業制による生産工程は、多くが職住一体型の小規模な家内工業であり、注文に応じて、各工程を担う職人が有機的関連性を持ちながら、きものを作りあげている。そのため、職人は集まってまちを形成し、まち全体が一体となって効率的にきものを生産してきた。

	<p>また、きものは、集散地問屋、地方問屋、小売店・百貨店などの流通を経て消費者の手に届けられるが、こうした流通を担う呉服商も集まって、まちを形成している。</p> <p>○ 西陣界限 西陣織のまちであり、日本を代表するきもの生産地である。起源は平安時代以前にまでさかのぼり、その名は、応仁の乱の後、西軍が本陣とした場所に職人が集まって織物の町を形成したことに由来する。 織屋の家は、背の高い織機が入るため1階の天井が高く、上の階が狭い、独特の織屋建（おりやだて）である。</p> <p>○ 堀川界限 かつては京友禅の染料を定着させるための友禅流しが、堀川や鴨川で行われており、染工場などが地域を支えてきた。</p> <p>○ 室町，新町界限 家康の時代から始まると言われる呉服商のまちであり、江戸時代、室町界限は日本の商業の中心地として茶屋四郎二郎（ちゃやしろうじろう）や三井家、住友家、松坂屋等の店が軒をならべた。従業員は店や路地に住み、職住一体で生活をしていた。 呉服商の町家は、奥行き長い敷地の表部分に店があり、玄関と坪庭を挟んで奥に居住部分のある表屋造り（おもてやづくり）が多い。 格子は、京町家の特徴の一つであるが、きもの関係の町家においては、一般的に織物の色糸を選別しやすくするため、採光に考慮し、上部を空けた糸屋格子、織物格子と呼ばれる格子を持つものが多いといわれる。</p>
<p>道具類， 原材料</p>	<p>(原材料の例)</p> <p>○絹糸 桑の葉を食べて育った蚕が繭になり、その繭を煮て取り出す。</p> <p>○綿糸 綿花から紡ぎ上げた糸。</p> <p>○麻糸 麻を原料として製造した糸。日本では古くから大麻，苧麻（ちょま）を紡いで麻布を作ったが、明治以後、亜麻，黄麻（こうま）が入る。</p> <p>○その他，ウール，合成繊維なども，きもの素材として用いられる。</p>

	<p>○染料 明治時代以前は、紅花、藍、紫草、刈安などの草木、樹皮、木の実、虫など自然界の染料で染めていた。現在は、多くが化学染料による。</p> <p>(道具の例)</p> <p>○織機 綴機、手機、力織機、ジャカードなどがある。</p> <p>○杼(ひ) 糸を巻いた管を舟形の胴部に収めたもので、経糸の間に緯糸を通す。</p> <p>○はしご 糸をずらす道具で、緋(かすり)加工に用いる。西陣で考案された独特の道具。</p> <p>○刷毛 京友禅に用いる。丸刷毛、引染用刷毛、とろ刷毛などがある。</p> <p style="text-align: center;">(杼) (刷毛)</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;">   </div>
<p>全国との つながり</p>	<p>仙台平(せんだいひら)、小千谷縮(おちやちぢみ)、加賀友禅、丹後縮緬(たんごちりめん)、博多織、大島紬(おおしまつむぎ)など、地域の名を冠した個性あふれる素晴らしい染織品が全国で生産されている。</p> <p>また、道具類、原材料の生産地も、全国に広がっており、きもの文化は全国各地とつながり、支え合って成り立っている。</p> <p>その中であって、京都は、最大の生産地、集散地、そしてきもの文化のネットワークの中心として、きもの文化を創造、継承する役割を担っている。</p>
<p>きものを 着る人、 愛でる人</p>	<p>京都には、着るものをはじめ、言葉、所作、住まい、食べものなどすべてにおいて美しくあらねばならないという精神が根付いている。きもの美しさは、作り手や売り手のみならず、きものを着る人、愛でる人など、きものを扱うすべての人々の手により、育まれてきた。</p>

	<p>京都では、宮廷文化の流れを汲み、落ち着いた色彩の中にも華やかさの感じられる、はんなりとした印象のきものが好まれ、きもの、帯、小物の合わせ方もめりはりをつける江戸好みに対し、馴染みの良いのが京好みといわれる。</p>
<p>きものと日々の暮らし</p>	<p>現在、きものは晴れ着やお洒落着として着用されることが多くなったが、昭和の半ばまで、きものは日々の暮らしの衣服であった。素材は、木綿などが多く用いられ、屑繭や不良繭からひいた糸で織った銘仙（めいせん）、ウールのきものなども流行した。古着の流通も盛んで、端切れやボロにいたるまで扱われた。</p> <p>女性のきものは、襷をかけたり、裾をからげたり、割烹着を着たり、工夫しながら着用された。男性のきものは、洋服が公の場で着用するものとして導入されたため、家庭の中で丹前や長着と羽織、浴衣や甚平でくつろぐかたちで戦後まで続いた。</p> <p>野良着など仕事着としてのきものは、身体を保護し、動きやすい工夫がされている。大原女をはじめ、その衣装には地域性やお洒落の特徴も見られる。</p>

きものと和の文化

項目	内容・特徴
<p>きものと伝統文化</p>	<p>きものと文化、人生の節目の儀式や行事などは、密接に関わっている。</p> <p>茶道、能・狂言、日本舞踊などの文化にとって、きものは不可欠の要素であり、きものと日本の伝統文化は相互に支え合っている。</p> <p>○ 文化</p> <p>茶道、華道、香道、能、狂言、雅楽、邦楽、日本舞踊、歌舞伎、剣道、弓道、花街など</p> <p>○ 儀式・行事</p> <p>宮参り、七五三、十三参り、入学式、卒業式、成人式、結婚式、葬儀、正月、祭など</p> <p>近年は、式場や衣装に和の文化を取り入れた和婚もブームになっている。</p> <p>十三参りは、数えて十三歳になる男女が寺社にお参りする行事で、女子は、大人への区切りとして、子ども用に仕立てた「四つ身」のきものから、初めて大人の「本身裁ち」のきものを肩あげして着るもので、特に関西で盛んである。</p>

	<p>○ 装束</p> <p>唐織（からおり）、縫箔（ぬいはく）などの高度な技術が駆使された豪華絢爛な能装束、法衣や神職の装束、祭の装束などの製作には、有職故実、すなわち古来の朝廷や武家の礼式・典故・官職・法令・装束・武具などの豊富な知識や特殊な技術が求められ、その存在はきもの文化を重層的なものにしている。</p> <p>また、きものは、日常生活の中にあって発展し、畳や襖などの和室のしつらえ、和食などとともに、日本の衣食住の文化をつくり、和の生活文化をつくってきた。</p>
<p>きものと 季節、風物</p>	<p>きものは、自然と深く関わり、季節感を大事にしてきた日本人の感覚、和の心が色濃く反映され、四季の自然を様々に写している。</p> <p>色や柄のなかに、日本特有の季節、風物を表現したものが多く見られる。</p> <p>○ 色</p> <p>きものに用いられる伝統的な色の呼び名には、自然の風物を表しているものが多く、季節感が感じられる。また、茶人の千利休にちなんで、抹茶の緑色と侘び茶の雰囲気을連想していわれた利休色など、人名に由来するものもある。</p> <p>十二単に代表される女性の重ね着の色合わせである「襲色目（かさねいろめ）」は、色の組み合わせで自然の色を表現している。</p> <p>(色名の例) 鶯色, 桜色, 山吹色, 栗色, 鳩羽色, 桔梗色, 若竹色, 利休鼠 (襲色目の例) 葵 (淡青/淡紫), 桔色 (淡香/青), 椿 (蘇芳/赤)</p> <div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: center; gap: 10px;"> <div style="background-color: #f9a825; padding: 5px; border: 1px solid black;">山吹色 やまぶきいろ</div> <div style="background-color: #c8a2c8; padding: 5px; border: 1px solid black;">鳩羽色 はとばいろ</div> <div style="background-color: #2e8b57; padding: 5px; border: 1px solid black;">若竹色 わかたけいろ</div> <div style="background-color: #8c8c4c; padding: 5px; border: 1px solid black;">利休鼠 りきゅうねず</div> </div>

○ 柄

きものの柄は文様といい,身近な植物や動物,自然の風景,身の回りの品々などを元にしたものが多く見られる。緋扇や御所車など雅な柄は礼装,生活に密着した柄はお洒落着などに用いられる。

(文様の例)

松竹梅, 菊, 楓, 菖蒲, 鶴, 蝶, 御所車, 手毬, 瓢箪,
観世水 (かんぜみず), 青海波 (せいがいは)



○ 季節のきまりごと

きものの装いには,季節による決まりごとがあり,6月と9月は単(ひとえ),7月と8月は絹(ろ)や紗(しゃ)など透ける薄物や麻,その他の季節は袷(あわせ)を着用する。色柄も四季の風物が描かれたものなどは季節に合わせ,少し先取りで身につけるのが粋とされる。

京都の年中行事や人々の暮らしは,四季の移り変わりに応じて,細かく配分されている。一年を四季,十二月,二十四節気,十日毎の旬,七十二候に分け,それに応じた数多くの行事を行いながら,季節が移り変わっていく様を大切に見つめ,日々の無事と自然への感謝を思いながら過ごしていくのである。

四季の変化を大切にする和の文化の特質が,きもの文化の特質にも通じている。

きもの由来 の言葉	きものは、日本人の生活に深く根差しており、日本語の中にはきものに由来する言い回しが多く息づいている。		
	例	意味	きものの部位等
	襟を正す	乱れた衣服を整える。事に当たって、気持ちを引き締める。	襟：衣服の首回りの部分
	折目正しい	礼儀正しい。	折目：衣服などを折りたたむときにできる筋
	袖触り合うも 多生の縁	道で見知らぬ人と袖が触れ合うのも深い宿縁に基づくものである。	袖：両腕を覆う部分
	袂を分かつ	行動を別にする。	袂：袖の垂れた部分
	辻褄が合う	前後がきちんと合って、筋道が通る。	辻：縫い目が十字に合うところ 褄：裾の左右が合うところ
	帯に短し 褄に長し	中途半端でどちらの役にも立たない。	帯：腰のあたりに巻く細長い布 褄：袖や袂がじゃまにならないよう背中で交差させ両肩にまわして結ぶひも
	紺屋の白袴	専門としていることについて、それが自分の身に及ぶ場合には、かえって顧みないものである。	紺屋：布地の染色を職業とする家や職人 白袴：染めていない袴 袴：腰から下を覆う衣服

伝統の継承と新たなきもの文化の創出

項目	内容・特徴
伝統の継承	<p>京都には、伝統と格式を重んじる厳格なきもの文化が歴然と存在している。</p> <p>京都では、茶道や華道の稽古事などに関連して着る機会が多いこと、多く残る行事の際に「ハレ」のきものを着る慣習が色濃いこと、多くの寺社の本山・本社、芸道や芸能の家元など「和」の文化の源泉が存在することから、着る頻度が高い、目の肥えた使い手が一定数あることにより、きちんとした伝統と格式を守ったきもの文化を大切に維持継承している。</p> <p>こうしたきもの着こなしには、和の文化への深い造詣を必要とするため、難解であるとの声も多い。しかし、翻って、こうしたきものは、身につける人の文化的なステータスを表象する存在となるため、ここぞという場面で着ることのできる、質の高いきものが求められている。</p> <p>また、グローバル化が進むなか、国内外における、外国の人々に関わる場や国際的な催しで、きものを着る機会が増えている。このような場では、自らのアイデンティティを表現する日本の美意識の集大成ともいべき伝統を継承したきもの存在が欠かせない。</p>
新たなきもの文化の創出	<p>その一方で、住まいの様式が和から洋になるなど生活様式が変化し、結婚式など節目の行事に対する考え方が多様化するなか、きもの購入形態の主流も、嫁入り道具など親が子にきものを誂える形から、自分好みのきものを自ら購入する形へと変わってきている。インターネットの普及により、消費者同士の情報交換や交流も盛んになった。</p> <p>現在、きもの消費全体は落ち込んでいるものの、和の文化に注目が集まるなか、きものブームが起こっており、自分らしく自由にファッションを楽しめる、お洒落着・日常着としてのきものが求められ、結果として、アンティークのきものや浴衣も広く着用されるようになっている。こうした需要においては、伝統や格式にとらわれすぎない、着やすく、手入れが楽で、現代的なセンスにあった色、デザインのきものニーズが強い。</p> <p>このような動きは、きものを愛好する人々の裾野を広げる意味で重要であり、きもの文化の中心である京都には、悠久の歴史が育んできた優れた美意識、伝統の神髄を継承しながらも、時代の変化に即し、多様化するニーズに応えて、現代のライフスタイルの中で着る新しいきものや着こなし方の登場など、新たなきもの文化の創出が求められている。</p>

(参考) きものの種類等

項目	内容・特徴
<p>きもの、 帯の種類と 小物</p>	<p>(主な女性のきもの)</p> <p><礼装></p> <p>留袖 : 黒地で染め抜きの五つ紋をつけ、前身頃に絵模様を施したきもので、既婚女性の礼装として用いられる黒留袖、色地に三つまたは一つ紋で絵模様のある色留袖がある。</p> <p>振袖 : 袖丈が長く、華やかに装う未婚女性の礼装、正装用のきもの。</p> <p>喪服 : 弔事や法事に着る黒無地に五つ紋のついた喪の正装。</p> <p><略礼装></p> <p>訪問着 : 主に胸、肩、袖、裾などに模様がつながるように染めたきもので、広げると一枚の絵のようになる。略礼装として幅広く用いられる。</p> <p>付下げ : 袖、前身頃と後身頃の両面、衿の模様が上向きに配置されるよう染めたきもの。訪問着よりはややカジュアルに用いる。</p> <p>色無地 : 全体を黒以外の一色に染めたきもの。紋がつくと礼装になり、紋がなければお洒落着となる。</p> <p><お洒落着・遊び着></p> <p>小紋 : 模様を一方向に染めたきもので、日常のお洒落着として着る。</p> <p>浴衣 : 木綿地で、襦袢をつけずに素肌に着るもので、元来は湯上り着や寝間着とされたが、現在は祭や花火大会等で着用される。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">(留袖) </div> <div style="text-align: center;">(振袖) </div> <div style="text-align: center;">(喪服) </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">(訪問着) </div> <div style="text-align: center;">(付下げ) </div> <div style="text-align: center;">(色無地) </div> </div>

(小紋)



(浴衣)



(主な女性の帯)

丸帯 : 普通の帯の二倍の幅で織り、二つ折りにして仕立てられ、表裏に柄のある豪華な帯で、最も格式が高く花嫁衣裳などに用いられる。

袋帯 : 丸帯に代わる現代の礼装用の帯で、振袖、留袖、色無地、訪問着、付下げといった、礼装・準礼装などに合わせる。

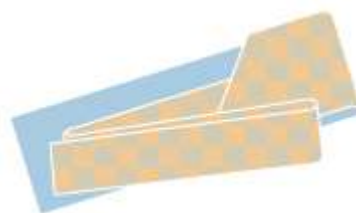
なごや帯 : お太鼓になる部分以外は二つ折りに仕立ててあり、締めやすいカジュアルな帯で、幅広く使える。

半巾帯 : 通常の約半分の幅で、帯揚や帯締を使わない。浴衣等に用いられる。

(丸帯)



(なごや帯)



(主な男性のきもの)

- ・ 正式な礼装は、紋付羽織袴である。
- ・ 黒以外でも羽織、袴で紋が付いていれば略礼装とされる。
- ・ 普段着としては、紬や御召、ウールのアンサンブルなどが用いられる。

(主な男性の帯)

角帯 : 幅約 20 cm の帯地を二つ折りにして仕立てたもので、一般に固くしまったものが用いられる。兵児帯より格式がある。

兵児帯 (へこおび) : やわらかい羽二重やちりめんの生地を用い、長さは 3.5 ~ 4 m である。子どもにも用いられる。



(主な小物)

帯締：女帯をお太鼓に結ぶとき，形を整えて仕上げに締める紐であり，組紐と布の紐とがある。前者には丸く組んだ丸打ちと，平らに組んだ平打ちがある。

帯揚：女帯をお太鼓に結ぶとき，帯枕にかぶせて前で結び，帯を固定する。綸子，縮緬などを用いる。

半衿：長襦袢，半襦袢の衿に，汚れを防ぐことと装飾を兼ねてかける。

帯留：帯締と同様に，帯が解けないように用いるが，紐先に金具のついてるものをいい，普段着などに用いる。明治中期以降には，細工物を紐に通したものが多く現れた。

足袋：甲と底とからなり，先端で親指を入れる内甲と他の4本の指を入れる外甲に分かれ，足首まで包む。

草履：足をのせる台部と，指先や甲の部分を密着させるための鼻緒がある底が平らな履物。礼装にはかかとの高いものを用いる。

下駄：木製の台部に鼻緒をすげた履物。

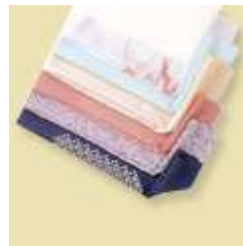
(帯締)



(帯揚)



(半衿)



きもの、帯、小物には、それぞれ種類や柄により格があり、礼装や略礼装、お洒落着や普段着などTPOに合わせて用いる。コーディネートにより、格調高くも、カジュアルにも、着こなしを楽しむことができる。

	女性	男性
礼装	留袖 振袖	五つ紋付羽織袴
略礼装	訪問着 紋付色無地 付下げ 色無地	三つ紋付羽織袴 御召一つ紋羽織長着 紬一つ紋羽織長着
お洒落着・遊び着	小紋 紬	紬

きものの
各部の名称

